

プラチナブルー

千葉
まひろ

胸がいっぱいで、涙が出そうだった。さっきまで食べていたチーズケーキの味なんてすっかり思い出せない。

表参道のカフェで差し出された指輪は、良太らしいシンプルな見た目をしていた。

「そろそろいいかな、って」

驚きすぎてフォークを落とさなかったことを褒めてあげたい。照れくさそうに耳を朱く染めた良太は、そう言って指輪を私の右手薬指に嵌めた。つめたくて気持ちのいいプラチナが、秋の西日で甘く光る。

「来年、一緒になってください」

肯いたとき、良太はどんな顔をしていたのだろう。

普通の先に幸せがあるのなら、一生つまらなくなつてかまわない。

やさしく甘やかしてくれる彼氏と、温泉旅行や流行りの映画を見に行つて、話題のデートスポットで人気の物を食べよう。そこに新鮮味がなくてもいい。私は幸せになるために恋をするのだし、幸せになるために指輪を受け取つたのだ。

代官山の空気はつめたくて乾いていた。

都会の空気なんてどこも変わらないけれど、この駅はアロマフレグランスや濃い石鹸の香りが混じって独特なものになっている。クリスマスが近いせいか、改札前のお店から讃美歌が流れていた。

彩恵との約束まで、あと一時間半もある。指先が冷えたのでポケットに入れると、固いものが当たった。食器洗いのために外してから戻すのを忘れていたのだ。

呼び出した本人はまだいない。

「お待ちせ」

それから十分経って、ようやく姿を現した文也は、上等なスーツに身を包んでいた。

片手をあげると、ロレックスの腕時計がちらりと見える。一月前に一緒に買いに行ったものだ。

「お久しぶり」

我ながら高い声が出て恥ずかしくなった。

「あと少しで友達が来るの」

「じゃあそこでお茶だけ」

コーヒーを二つ注文し、奥の席に座った。仕事帰りらしい文也は持っていた鞆をとなりの座席に置くと、さっそく大きな溜め息を吐いた。

「美琴さんが時間作ってくれて嬉しかったよ。最近は忙しくて、中々会えなかったから」

伏せられたまつ毛が頬に影を落とす。

「私も、ちゃんと連絡できなくてごめんね」

「いいんだ。ちよつとでも顔を見ることができてよかった」

そう言った文也のはにかみ顔がかわいく思えて、私は照れ隠しに苦いコーヒーを呑み込む。会うのは久しぶりだったから話したいことが沢山あった。この後渋谷に出て、雰囲気の良いバーでゆっくり飲んでから抱き合えたらどんなに良いだろう。

しかし私は臆病であつたので、きつかり一時間経ってから文也と別れた。たとえ逢瀬を隠すための予定であっても、良太に嘘をついたことにしたくなかつたのだ。

「また電話するから」

ホームへ降りた文也とほとんど入れ違いで上がってきた彩恵が、こちらに手を振っている。笑って、いつも通りになった左手を振り返した。

家に帰ると、良太がラーメンを作っていた。

「目が覚めたら、なんだかお腹空いちやつてさ」

出会った時より出っ張つたお腹を撫でながらそんなことを言う。

「彩恵ちゃんとの食事はどうだった」

「餃子を食べた。美味しかったよ」

同様を始めてから、私たちはよく休日にラーメンを作った。良太の作るスープは酢が入っていて美味しい。辛いものは苦手だといったら、多めに入れてくれるようになったのだ。

インスタントは香辛料がどばどば入っているから美味しくないんだ。作れるなんてすごい、と褒めると、良太はそう言って丼に肴卵を二つ落とした。

いつから一緒に作らなくなったのか、もう思い出せない。

普通であることは、慣れてしまうと、幸せを探すのが難しくなる。なんだか無性に泣きたくなって意味もなくコップに水を注いでみる。

左手にあるブラチナは、今はただずっしりと重い。